

147

2024 WINTER

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 18

袖木沙弥郎《無題》(部分)
平成24(2012)年
型染・木綿
198 × 91.5 cm

柚木沙弥郎 永遠のいま

廣瀬 就久(主任学芸員)

当館は、2024年1月31日に惜しまれつつ逝去した染色家、柚木沙弥郎の特別展「柚木沙弥郎 永遠のいま」を開催する。柚木は1922年10月17日に、東京市滝野川区(現東京都北区)田端に生まれた。柚木家は倉敷市玉島の旧家である。祖父・玉邨(1865-1943)は実業家であり、南画家としても活動した。父・久太(1885-1970)は、1906年に上京した洋画家である。

芸術的な環境に恵まれながら育った柚木は、1942年に東京帝国大学(現東京大学)文学部美学美術史科に入学した。しかしながら太平洋戦争のため、学業は中断を余儀なくされ動員される。幸い内地で敗戦を迎えるが、田端の自宅は被災し、父の実家がある玉島に復員した。

1946年、父の生家に近い倉敷の大原美術館で職を得る。同館の創設者で、倉敷の発展に貢献した事業家である大原孫三郎(1880-1943)は、柳宗悦(1889-1961)が提唱した民藝運動を早くから支援していたが、初代館長の武内潔真(1888-1981)も民藝の理解者であった。柚木は武内から民藝運動を知る。そして芹沢銈介(1895-1984)の型染カレンダーに強く惹かれて染色家を目指す。

47年に大原美術館を退職して、武内、柳の紹介で芹沢に学ぶ。芹沢の薦めで静岡県由比町(現静岡市清水区)の染物屋に住み込んで、染色の基礎を身につけた。48年に現在の倉敷市で染色活動を始め、初作品《紅型風型染布》(図1)を制作する。この作品は柳宗悦の目にとまり、日本民藝館の所蔵品になった。

柚木は49年から2022年まで国画会展覧会(国展)に毎年出品する。民藝運動のなかで染色家として活動した。また50年から女子美術大学工芸科専任講師に就任して後進を教育した。柚木の作品では、《むら雲三彩型染絨着物》(図2)のように、明るい色彩と機知に富んだ構成が心地よく調和している。

大原美術館を退職して東京に戻ってからも、岡山との関連は長く続いた。岡山県民藝振興株式会社は47年に設立されたが、初代社長の杉岡泰(1906-1993)は開業当初から柚木の作品を販売した。また柚木は大原美術館のロゴを制作している。現ロゴに先立って、2つのロゴが50年と53年に使用されたことが分かった。倉敷レイヨン株式会社(現株式会社クラレ)の社内誌『倉敷レイヨン制作月報』では、57年から68年まで、干支を描いた表紙の型染原画を制作した。同社が所蔵する原画(型染・紙)4点を展示する。高梁川流域連盟(倉敷市)が刊行する地方史研究誌『高梁川』では、62年から64年まで、表紙、中扉などを担当した。倉敷中央病院は75年から病院建築に民藝関連の調度品を設えた。2002年には小児科待合壁面装飾《サーカス》が柚木に発注制作された。本展では



図1



図2



図3



図4

岡山だけでなく、展覧会巡回地である岩手、鳥根、静岡に関する特集展示も設けている。

柚木は50年代に、もともとは浴衣や手拭いに使用される伝統技法「注染」を広幅の布へ展開することを考案し、女子美術大学の学生とともに試行錯誤しながら完成させた。《注染水玉文布》(1950年代制作、日本民藝館蔵)などを出品する。

抽象的な文様だけでなく、《ならぶ人ならぶ鳥》(図3)や《型染水辺文二曲屏風》(個人蔵、1995年)など、人物や動植物の文様を手がけている。素朴で生命力にあふれる作品である。

87年から91年まで女子美術大学、女子美術短期大学の学長を務めたあと、柚木は同大学を退職した。それから染色作品を主軸にしつつも、版画やコラージュ、絵本、立体作品など、ジャンルの垣根を超え、その創作世界をより大きく、より豊かに広げ続けた。《若いひまわり》(2014年、モノタイプ・アルシュ紙、公益財団法人泉美術館蔵)や《夜の絵》(2005年、コラージュ・布、神奈川県立近代美術館蔵)、《『つきよのおんがくかい』絵本原画》(1999年、アクリル絵具・紙、木城えほんの郷蔵)、立体作品《こいのぼり》(図4)などに着目してほしい。

建築を装飾する大規模な作品として《波動》(1990年、型染・絹、川口市蔵)を紹介する。川口市立川口総合文化センターメインホールのホワイエ中央部に設置されているタペストリーで、メインホール大規模改修のため出品が可能になった。制作歴中期の貴重な作品で、展覧会初出品である。

当館では2008年に特別展「柚木沙弥郎 わきあがる色と形」を開催したが、その後も、柚木は多彩な作品を制作した。また先述した大原美術館旧ロゴや《波動》など、把握していなかった作品に出会えた。「用の美」を掲げる民藝を出発点に、100歳を迎えてなお、人生を愛し、そして楽しんだ、柚木沙弥郎の75年にわたる創作活動の全貌を堪能いただきたい。

【特別展】「柚木沙弥郎 永遠のいま」(会期:2025年2月14日~3月23日)

- 図1:《紅型風型染布》
1948年 型染、木綿 日本民藝館
- 図2:《型染むら雲三彩文着物》
1967年 型染、絹 日本民藝館
- 図3:《ならぶ人ならぶ鳥》
1983年 型染、絹 世田谷美術館
- 図4:《こいのぼり》
2016年 型染、木綿
公益財団法人泉美術館

SPIN 記憶の再生 第十四回I氏賞受賞作家展会場より

古川 文子(学芸員)



花房紗也香《イプとヴィーナス》2024



加瀬野裕介 ギターソロ演奏(11月30日公演)の様子



山田彩加《生命の変容と融合-0への回帰》2012



日原聖子《水の人》2024 映像

ただいま当館2階展示室では、2019年度(第13回)と2020年度(第14回)に岡山県新進美術家育成「I氏賞」奨励賞を受賞した4人の作家による展覧会を開催しています。

会場に入るとまず、花房紗也香の絵画作品《イプとヴィーナス》・《抱き合う子どもたち》が、大きく目の前に広がります。画中画のような「フレーム」を介して、内と外とが互いを行き来する感覚を意識した空間表現は、花房の得意とする手法です。2018年に岡山県北部の奈義町に移住してからの生活環境が、風景や自然のとらえ方に変化を与えたと花房は語ります。アトリエで絵画教室を開き、幼い子どもたちの自由な造形表現に触れる中で、新たな素材による出品作《tomorrow and shine》シリーズも育まれました。クレヨンと水彩にレジンを施した小品群が、油彩とアクリルによる大作2点と彩りゆたかに響き合う展示空間です。その隣には、加瀬野裕介の映像・立体・平面作品が展開します。県内各地の古墳と加瀬野家の墓群に取材した映像作品7点を壁面に並列で同時上映し、その前にカラフルな手作りのスニーカー36足とベッドを配置して、自らの音声による作品を流すなど、多彩な表現手法に満ちた構成です。さらに会期中の毎週土曜日には、新旧いくつものエフェクターを駆使した音作りを体感できる、ギターソロ演奏に挑みます。11月30日に中庭で開催した「美術の夕べ」では、風にざわめく竹や落ち葉など自然の音との共演も見事でした。

続く展示室には、一転してモノトーンを基調とした山田彩加の版画作品が並びます。受賞時の出品作《遺伝子の行方-眼差し》・《生命の変容と融合-0への回帰》などの大作に、アクリルや色鉛筆等で繊細な彩色を施した近作、版画作品そのものを集め本の形に装幀した版画集や、初期の油彩画2点も加え、これまでの制作の軌跡をたどれるような内容です。作品の主題である「命の繋がり」の中で、絶え間なく繰り返される生命のイメージが、版表現の内包する複製性や偶然性と相まって、深遠な世界へと見る者を誘います。その奥の一室は、日原聖子の映像作品とインスタレーションによる空間です。戦時中に岡山に疎開していた祖母の記憶をもとにした《水の人》は、ゆかりの地を何度も訪ね、リサーチを重ねて制作した映像作品から始まります。制作の過程で出会った人びとや、建築物、伝えられた品々との対話が静かに沁みこんでくるような空間です。本展では、祖父・日原晃(1910-1997)の油彩画《パリーの街角》・《山陰の海》(当館蔵)と、津山市の祖父のアトリエに遺された机や布製品によるインスタレーションにも取り組みました。

四者それぞれの表現の中に、視覚の記憶、身近な人の記憶、太古の記憶、生命の記憶など、さまざまな記憶がめぐり、新たな形で紡ぎ出されたような瑞々しさが感じられます。彼らの作品との出会いが、さまざまな情報を手軽に記憶し再生することのできる現代生活の中で、自分自身の記憶や感覚を取り戻す機会となれば幸いです。

【岡山の美術 特別展示】「第十四回 I氏賞受賞作家展 SPIN 記憶の再生」(会期:2024年11月21日~12月22日)

やさしい日本語×ミュージアム事業 2024年夏プロジェクト

岡山県立美術館×林原美術館×夢二郷土美術館×岡山県立図書館

岡本 裕子(主任学芸員)

「やさしい日本語(以下、「やさ日」)」とは、日本に住む外国人など日本語を学んでいる人にもわかりやすくした日本語です。難しい言葉をやさしくして、「読むこと」や「話すこと」を助けるものです。昨年度、当館では「やさ日でアートを楽しむワークショップ」を実施しました^{*1}。そして、林原美術館では「やさ日の展示解説」を設置しました。その後の展開として、近隣のミュージアム等と共働して取り組む「やさ日×ミュージアム事業 2024年夏プロジェクト(以下、「夏プロジェクト」)」の構想が生まれました^{*2}。夏プロジェクトの内容は、「やさ日のロゴ制作」と「やさ日の展示解説」、「やさ日についての本の紹介」です。取り組みにあたっては、各館の担当者とやさ日監修者、グラフィックデザイナーが共働で行いました^{*3}。ここでは、「やさ日のロゴ制作」と当館の取り組みについて紹介します。

まず、「やさ日のロゴ制作」についてです。一番の特徴は、第一印象が多様に発生することにあると考えています。例えば、日本語で読めることに気づく人、抽象表現の柔らかさにイメージを広げる人(「柔らかさ」は、「優しい」にも通じるかもしれません)、色にイメージを広げる人、日本語の歴史に思いを馳せる人などを想定しています。また、様々な場面での活用を想定して複数のバリエーションがあることも特徴として挙げられます。各ミュージアムでは、バリエーションの一つを使って通常の展示解説とともに「やさ日の展示解説」を設置しました。図書館では、バリアフリーコーナー「いきいき読書ひろば」で「やさ日」の本を紹介する際、案内表示に使用しました。

次に、当館での取り組みについてです。夏の展示^{*4}に併せて、やさ日の展示解説とアンケートを実施、そして、やさ日のロゴをパネルと動画で紹介しました。アンケートに寄せられたコメントの一部を紹介します。

「やさしい日本語の提供をありがとうございました。絵などでもっとたくさんやさしい日本語での紹介があればうれしいです。また、来ますよ！(中国・20代)」「やさしい日本語はわかりやすい。少なかつたのもっとあれば嬉しいです(韓国・年齢不詳)」「四君子屏風の解説がふりがなつきで、小学校3年生の娘にも簡潔でとても分かりやすかつた。」「四君子」という題材とその意味を初めて知つたので興味深かつた(日本・30代)」「通常の説明をやさしい日本語で補う部分

もあり、日本語を母語としている自分にとつても美術入門として易しい説明になっていたと思う(日本・30代)」「ことばの教室で、読みに困難のある子どもや外国籍の子どもの支援をしています。日本語は難解だと常々思います。横書き、分かち書き、ルビ、どれもよかつたです(日本・50代)」「これから外国にルーツがある方が増えていく中、先を見通したすばらしい取り組みです(日本・40代)」

寄せられたコメントから、外国にルーツを持つ人にとつても日本語を母語としている人にとつても、「やさ日」が美術館のアクセシビリティを高めるツールの一つになり得る可能性を感じます。そして、「やさ日×ミュージアム事業」を後押ししてくださる示唆に富んだコメントに心より感謝申し上げます。すべて掲載できず申し訳ございません。

今年度は、「夏プロジェクト」に続いて「やさ日で日本文化を楽しむワークショップ」を実施します^{*5}。今年度の成果と課題をふまえ、次年度への取り組みにつなげていきたいと考えています。

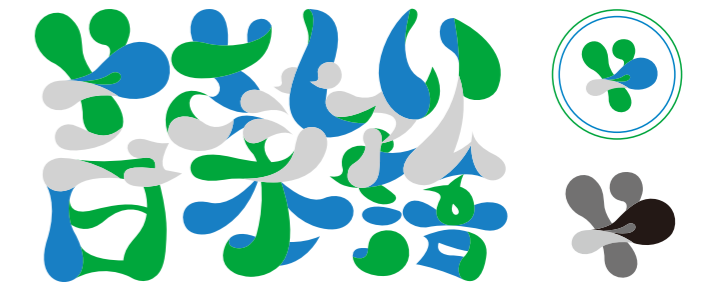
*1: 岡山県立美術館ニュース144号(<https://okayama-kenbi.info/kenbi/wp-content/uploads/2024/03/news144.pdf>)

*2: 岡山県立美術館、林原美術館、夢二郷土美術館、岡山県立図書館の共働事業「令和6年度文化庁 Innovate MUSEUM事業」、並びに「公益財団法人エネルギー文化・スポーツ財団 2024年度助成事業」として実施(<https://okayama-kenbi.info/topi-yasashinihongo>)

*3: 高尾戸美氏(合同会社マープルワークショップ代表)、桑田知明氏(グラフィックデザイナー/京都市立芸術大学総合デザイン専攻非常勤講師)

*4: 「没後八十年 波多野華涯一筆と生きた女性」会期:2024年7月13日(土)~8月25日(日)

*5: 「煎茶の世界を楽しむ」2024年12月1日(日)実施



桑田知明氏による「やさしい日本語」ロゴのバリエーション(一部)

近現代岡山の美術家とキリスト教—坂田一男の場合

橋村 直樹(主任学芸員)

現在、来年度に開催予定の特別展の準備を進めている。近現代日本美術史の中でキリスト教とかかわる美術家や作品に注目し、クリスチャンの作家によるキリスト教主題の作品や、信者ではなくともキリスト教精神に共鳴した作家による静謐な祈りを感じさせる作品などを展観することで、明治から現代に至る日本の美術にキリスト教の影響がいかに及んでいるか探ることを目的とする展覧会である。同展では、明治期にキリスト教布教の先進地だった岡山の地域性に着目する一章を設け、キリスト教と関係する岡山ゆかりの美術家や作品についても紹介する予定だ。

ここでは、近現代岡山におけるキリスト教とかかわる美術家の中から、日本の抽象絵画の先駆者として知られる坂田一男(1889-1956)を取り上げ、坂田とキリスト教との関係について記しておきたい。

坂田一男といえば、中央画壇から距離を置き、玉島のアトリエに籠って自己の造形を追求した孤高の抽象画家として知られるものの、キリスト者であったことは一般的にはあまり認知されていないだろう。確かに、聖書挿絵を描いた小磯良平のような近代日本の他のクリスチャン画家とは異なり、坂田は聖書に取材した作品やキリスト教的象徴を描いた作品を遺してはいないし^{*1}、玉島時代の日記にも教会に通っていた形跡はなく、表面的には熱心なキリスト教徒のように映らない。しかしながら、坂田にとってキリスト教は、少年期から最晩年まで生涯を通じて、その内面的、精神的側面において大きな影響を及ぼしたと思われる。

坂田一男は、岡山中学卒業後に上京した1908(明治41)年頃、本郷教会の海老名弾正より洗礼を受けてクリスチャンになったが^{*2}、そもそも坂田は、東京での受洗以前、岡山時代からキリスト教と深くかかわっていた。というのも、医学者の父・坂田快太郎がドイツへ医学留学していた間(1900-02)に、坂田の母・八万重がキリスト教に入信して敬虔なクリスチャンになったからである。やがて祖母もキリスト教に導かれて日蓮宗から改宗し、ドイツから帰国した父も受洗したのであった。そうした家族のもと、中学時代の坂田は、毎週日曜には岡山教会の日曜学校に通ったり、宣教師による街頭での伝道活動を手伝ったりしていた^{*3}。

また、坂田が両親に宛てた手紙にはよく聖書の言葉が引用されていたと伝えられるし、下の妹の日出には、「人間は信仰の杖さえ持っていれば大丈夫だ」や「エホバはわが牧者なり。われ乏しきことあらじ」といったキリスト者らしい言葉を遺していた^{*4}。さらに、坂田の遺品の中には、内村鑑三の弟子の斎藤宗次郎が編集発行した月刊誌『基督信徒之友』もあり、そうしたキリスト教雑誌を普段から愛読していたと想像される。加えて、フランス留学から帰国した坂田が玉島でともに暮らしたお手伝いの三宅ト免は、石井十次が創設した岡山孤児院の出身者であり、毎食時に食卓で神への祈りを欠かさなかった敬虔なクリスチャンであった^{*5}。

このように、坂田にとってキリスト教は、表面的にはわかりにくい^{*6}、内面的に、精神的にきわめて重要だったのである。そして、そのようなキリスト教の影響は彼の画業にも及んでいたと考えられるが、坂田作品をキリスト教で解釈する試みは、これからの課題としたい。

*1:ただし、2019年度開催の「坂田一男 捲土重来」展を監修した岡崎乾二郎氏は、坂田の最晩年の、不定形の線によるひとつのデッサンを聖書主題の「キリストの復活」とみなしている。『坂田一男 捲土重来』(東京ステーションギャラリー、2019年)181頁。岡崎氏の見解は魅力的ではあるが、その作品は偶然そのように見える「チャンス・イメージ」のように思われる。

*2:『画人坂田一男』(玉島文化倶楽部、1964年)11頁。

*3:小倉忠夫編『宿命の抽象画家 坂田一男』(美術出版社、1966年)25-26頁。

*4:同書、72-73頁。

*5:大橋宗志「坂田一男のハウスキーパー トメさんを訪ねて」『ロカリズム』第9号、1989年(『SAKATA』第2号、坂田一男研究会、2011年に再録)。



坂田一男遺品『基督信徒之友』第77号、1940年8月20日

展覧会スケジュール

12月
December

11月21日|木| - 12月8日|日|
【特別展】
第71回 日本伝統工芸展 岡山展

11月21日|木| - 12月22日|日|
【岡山的美術展】
第十四回 I氏賞受賞作家展
日原聖子・山田彩加・加瀬野裕介・花房紗也香
【岡山的美術展】
もっと伝統工芸 美と技の出会い(漆芸)
浅井康宏・小椋範彦・塩津容子

1月
January

12月22日|日| - 2025年1月13日|月・祝|
【教育普及展】
第6回 みんなの参観日
「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」

2月
February

12月24日|火| - 2025年2月2日|日|
【岡山的美術展】
満谷国四郎
—新収藏品と雑誌挿絵をまじえて—
第2篇

満谷国四郎(1874-1936)は現在の総社市に生まれました。写実的な画風で注目されますが、大正期には平明で装飾的な作風へと変わります。当館は複数のご所蔵家から作品の寄贈と寄託を受けました。2008年度に開催した収藏品展示の第2篇として、09年度以降の新たな収藏品も交えた展覧会です。

2025年2月14日|金| - 3月23日|日|
【特別展】
柚木沙弥郎 永遠のいま

柚木沙弥郎(1922-2024)は、倉敷市玉島の洋画家、柚木久太の次男に生まれました。戦後に職を得た大原美術館で民藝運動に出会い、芹沢銈介のもとで染色家として歩みます。型染の第一人者として活躍し、自由でユーモラスな形態と美しい色彩が調和した作品は、多くの人々に愛されています。1990年代以降は、染色のみならず、版画やコラージュ、絵本、立体など大きく創作世界を広げ、100歳をこえてなお、意欲的に活動しました。本展は柚木の長きにわたる創作活動の全貌を紹介します。

3月
March

*最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

2025年1月25日|土| 18:00-18:30

美術の夕べ 「満谷国四郎について」

講師 廣瀬就久(主任学芸員)

会場 地下1階展示室 ※要観覧券

収藏品の紹介 Vol. 18

柚木沙弥郎《無題》
平成24(2012)年
型染、木綿
198.0 × 91.5 cm



木綿に朱と紺の型染。壁や空間に架けられる。大型円二個。いずれも朱色大型円のなかに紺色円。周りに朱色小円八個と紺色小円五個。左下に紺色の輪一個。全体は対称形でない抽象文。柚木は晩年に多くの型染布を制作した。表題がある作品とない作品がある。この作品は後者。地図なのか、人の集まりなのか、あるいは心の中の情景なのか。思いを巡らせながら鑑賞されたい。(廣瀬)

微茫惨澹

守安 収

「微茫惨澹(びぼうさんたん)」という言葉があります。私は大学に入って所属した美学・美術史講座の脇田秀太郎教授の講義で初めて耳にしました。それはほんやりとしたかすかなさま、薄暗いさまをいうのですが、明の画人李日華は、画は何となく薄暗く奥深い趣のあるものを至高とし、田能村竹田は、浦上玉堂はこの微茫惨澹の境地を理解し実現したと高く評価するのです。確かに玉堂は擦筆や渴筆を駆使して独自の含蓄のある絵画空間を創出したと認めてよいでしょう。去る12月22日まで、栃木県立美術館で開催した当館収蔵品(所蔵+寄託)95件から成る「浦上玉堂展」会場で上映を行った19分の映像タイトルは「微茫惨澹—浦上玉堂が描いたもの」です。当初は、玉堂画の模写を通じて筆の運びの特徴を知ることができたらと考え、日本画家の浅見貴子さんに依頼したのですが、最終的には玉堂が使用した数種の「筆」と、その特性によって彼の描法が進化し多様化していく様相が明らかになるという興味深いものに仕上がりました。▼映像制作の終盤、ナレーションに立ち会いました。映画の吹き替えに使われる本格的なスタジオも、本職のナレーターにお目に掛かるのも初めてで、とても面白い体験でした。画面に合わせて語るスピードや声の抑揚、強弱に目と耳とを凝らしていると、作業は時々ストップ。ナレーターが、このあたりで声が擦れたと告げても、私は気づきません。聞き直してもそうですか？という程度。でも、やり直しです。玉堂自身は非専門家であることを標榜していましたが、現代のプロというのは本当にすごいですね。栃木展の後は、この映像を皆さんがご覧いただけるように準備いたします。



岡山県立美術館

OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

中西ひかる

日本伝統工芸展が終了したあとは、しばらく大きな展覧会はお休みですが、岡山の美術展を地下展示室にて開催しています。今回は満谷国四郎の作品から、新収蔵品を中心に雑誌挿絵も含めた特集展示と、岡山県立岡山朝日高等学校の150周年と絡めて、当館収蔵品の中から学校にゆかりのある作家の作品を紹介しています。さらに、昨秋発表がありました、2025年瀬戸内国際芸術祭に関連して当館で開催予定の「平子雄一展」にさきがけて、コーナー展示も行っておりますので、冬のお出かけも、ぜひ当館へ足をお運びください。